

# Nara Women's University

## 日常会話における語彙選択をめぐるプラクティス

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 奈良女子大学文学部 欧米言語文化学会 公開日: 2017-02-23 キーワード (Ja): カテゴリー, カテゴリー・ターム, プラクティス, 会話分析, 語彙選択, 指示表現, 日常会話, 名前の選択 キーワード (En): 作成者: 須賀,あゆみ メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10935/4427">http://hdl.handle.net/10935/4427</a>

# 日常会話における語彙選択をめぐるプラクティス

須賀 あゆみ

## 1. はじめに

本稿は、会話分析の手法を用いて、話し手がものを指示する語彙の選択をめぐる、聞き手の知識を調べるプラクティスに注目し、指示表現の選択指針について検証することを目的とする。

Sacks *et al.* (1974: 727) は、会話の中で話し手は、聞き手が誰であり、どのような知識を持っているのか、聞き手と指示対象はどのような関係なのか、会話においてどのような活動をしようとしているのかを考慮して、言葉を選択し、発話をデザインしていると述べている。Sacks & Schegloff (1979) は、この「聞き手に合わせたデザイン」という指針が、人物を指示する表現の選択に適用されると論じている。また、Schegloff (1996) は、名前 (name) によって聞き手が指示対象を認識可能と想定されるならば、その名前を用いるのがよいという指針（「名前の選好」）に従って指示表現が選択されるとしている。<sup>1</sup>

人物や場所などの唯一的に同定可能な指示対象を指示する際に、話し手は聞き手の知識を考慮して、名前を用いるか描写を用いるかを選択すると同様に、聞き手が唯一的に同定できると想定していない対象を指示する場合も、指示対象のカテゴリーに関する聞き手の知識を想定して、「カテゴリー・ターム」（1語名詞）を用いるか描写を用いるかを選択している（須賀 2007, 2014）。

Kitzinger & Mandelbaum (2013) は、産婦人科のカウンセラーと相談者との英語による会話で、カウンセラーは、相談者が専門用語を理解できると想定されるなら専門用語を使用しなければならないという指針に志向して専門用語を用いている、と論じ、この指針は、人物指示における「名前の選好」に平行するものとして捉えられている。（以後、カテゴリー・タームとテクニカル・ター

1 話し手が、聞き手が名前を知らないとして想定している人物を指示する際に、*that girl 'e used to go with for so long* のように認識用描写 (recognitional description) を用いた後、聞き手が意図的にその人物の名前を用いて *Alice?* (「アリスのこと?」) と確認を求める行動に出る事例によって、「名前の選好」が証拠づけられると述べている (Schegloff 1996:461)。

ムを包括的に表す場合、「ターム」と表記することにする。)

本稿では、日本語の日常会話の観察から、話し手が念頭においている対象を指示する際、「タームの選好」(話し手が知っているタームの意味を聞き手が理解できると想定されるならば、そのタームを使用するのがよい)という指針にそって指示表現が選択されることを例証する。第2節と第3節では、話し手が指示対象のカテゴリーに関する聞き手の知識を調べるプラクティスについて記述する。第4節では、話し手が「タームの選好」という指針に従って指示表現を選択していることを、具体的事例を用いて検証する。第5節では、会話の主活動を達成するために語彙が選択される側面を記述する。第6節では、話し手がタームを選択することによって生じる問題を回避するためのプラクティスを取り上げ、話し手は、聞き手の知識を考慮しつつ、指示表現を選択していることを明らかにする。

本稿での議論は、アメリカに滞在中の日本語母語話者と日本在住の家族や親族、友人との電話による会話が収録された CallHome Japanese コーパス (Linguistic Data Consortium による作成) のうち、各組会話の途中部分 15 分間 100 組の計 25 時間分の観察に基づいている。本稿に記載するトランスクリプトは、コーパス既存のトランスクリプト (Wheatley *et al.* (1996)) を参考に、Gail Jefferson によって考案された記号を用いて転記したものである (転記記号の意味については、文末の「トランスクリプト記号一覧」を参照)。会話者のアイデンティティは、アメリカ滞在者を A、日本在住者を B と表記している。

## 2. カテゴリーを指示するタームと描写

本稿で注目する、指示対象のカテゴリーに関する知識を調べるプラクティスとはどのようなものか、2 組の電話会話を例に説明しよう。(1) と (2) はどちらも離れて暮らす姉妹によって行われた会話の一部であり、一方が他方に、最近何かを購入したという出来事を報告している。

### (1) [CallHome JA 2210]

((姉妹の会話. アメリカ在住の A が、0 歳の娘に母が日本から服を送ってくれたが、A が住んでいる地域では暑くて着られないと話した後))

- 01 B: 昨日な,  
 02 A: うん.  
 03 B: 生協が来てな,  
 04 A: うん.  
 05 B: あの:(.) ↑タペストリーっていうんがあるやろ.  
 06 <壁[掛けな].  
 07 A: [あ:あ:]  
 08 あ:あ:.  
 09 B: あれでもってな,  
 10 A: [うん].  
 11 B: [お雛] 様のタペストリーがあったん[よ].  
 12 A: [う]わ::..  
 13 B: それ頼んだからそれ送るわ.  
 14 A: うわ: ありがとう. 嬉しいな[:].

(2) [CallHome JA 1688]

((姉妹の会話. 先行会話で B が最近短く髪を切ったら周囲の反応がひどかったということを話している. その後, お互いの地域の天候に話題が移り, やりとりした後))

- 01 A: .hh そうで>あそれであたしね<  
 02 ↑くるくる:髪:巻く:>ほら<カーラーあるじゃん.  
 03 B: う:[ん  
 04 A: < あれ ね:>↓人から買ったの.  
 05 10ドルで.  
 06 ビ[ダル]サスーンのやつが-  
 07 B: [ え ]  
 08 ¥よかったね.¥

(1) の話し手 B は、最初から「お雛様のタペストリーを頼んだから送るわ」のような一続きの文として発話を構成してはいない。まず、「タペストリーっ

というんがあるやろ」と、「タペストリー」というものを知っているかどうか聞き手に確認を求め、「あ:あ:」という反応を得てから、「お雛様のタペストリー」を注文したことを報告している。<sup>2</sup>

一方、(2) の話し手 A も、「あそれであたしねへアカーラー人から買ったの」のように、人からものを買ったという出来事を一続きの文で発話しているわけではない。まず、「くるくる:髪:巻く:>ほら<カーラーあるじゃん.」と、話し手が念頭においているものがどのようなものか理解できるかどうか聞き手に確認を求めている。そして、B から「う:ん」という返答を得た後、「<あれね:>人から買ったの.」と、報告している。

(1) も (2) も、話し手は聞き手が知らないものを購入したということを報告している。しかし、購入したものを指示する際に、異なるプラクティスを用いている。(1) の話し手は「タペストリーっていうんがあるやろ」と発話し、聞き手が「タペストリー」というカテゴリー・タームを知っているかどうか調べようとしている。(2) の話し手は「くるくる:髪:巻く:>ほら<カーラーあるじゃん.」と発話し、描写が表すカテゴリーがどんなものか聞き手が知っているかどうか確かめようとしている。

本稿では、このように、話し手が念頭においているものに言及するとき、そのものが属するカテゴリーについて聞き手の知識を調べる相互行為的活動について記述する。この活動において、話し手が念頭に置いている指示対象は、必ずしも聞き手が認識できるということを想定しているものではない。(1) で B が注文したお雛様のタペストリーや、(2) の A が友達から買ったヘアカーラーは、聞き手がその実物を知っているわけではない。しかし、話し手のタームや描写の使用により、聞き手は指示対象の存在を理解することができる。このように、カテゴリーの知識を調べるプラクティスは、聞き手が指示対象を同定できないと想定しているときにも、指示対象に言及する際に用いられるプラクティスである。3.1 節では (1) に見られるプラクティスについて、3.2 節では (2) に見られるプラクティスについて記述する。

2 この事例では、11 行目で「お雛様のタペストリー」という表現で導入された聞き手が知らない対象の理解を促すために、事前に「タペストリー」というカテゴリー・タームの意味を聞き手が理解できるかどうか確認している。

### 3. カテゴリーの知識を調べるプラクティス

#### 3.1. カテゴリー・タームの知識を確認する

話し手が念頭においている対象をカテゴリー・タームを用いて指示しようとするとき、聞き手がその意味を理解できるかどうか確認を求めるプラクティスについて記述する。具体例を(3)に示す。

#### (3) [CallHome JA 1123]

((日本在住の男性 B とアメリカ在住の息子 A との会話. B が日本は雨が少なく, 台風が沖縄に来たが風台風で雨が降らなかったと話した後))

- 01 XM⇒ A: 今こっちはね:  
02 X1→ あの::: ハリケーンって>あるでしょう<い  
03 Y1→ B: >うん<う::ん  
04 XM⇒ A: あれが近くに來てるから .hhhh  
05 雨はドー hh ドバツと降ってるよ.

1行目で A は現地の天候について語ろうとしている。その途中で、「ハリケーン」というアメリカに特有の気象現象に言及しようとしたとき、このカテゴリー・タームの使用が B にとって適切かどうか、つまり、カテゴリー・タームが表す意味を理解できるかどうか調べる活動を2行目で開始している。これに対して、3行目で B は理解の主張を示す反応をしている。この反応を得て、A は「ハリケーン」というカテゴリー・タームを使用することが問題ではないと判断し、1行目で中断した語りを4行目で再開している。

話し手の行為を X、受け手の行為を Y と表示すると、(3)に見られる活動は以下のように記述することができる。

#### (4) [XM⇒ 話し手: 主活動]

- X1→ 話し手: **ターム (C)** の意味が理解できるか確認を求める  
Y1→ 聞き手: 応答する  
XM⇒ 話し手: 会話の主活動の開始 [再開]

(4) の活動は、以下のような要素を資源として行われる。

(5) [XM⇒ 話し手: 主活動]

X1→ 話し手: フィラー カテゴリー・ターム (C) であるでしょう

Y1→ 聞き手: 応答表現

XM⇒ 話し手: 指示詞 (ソ・ア系) …

X1 では、「なんか」「あの」「その」「ほら」などのフィラーや言い淀みが生じ、発話を構築する上で問題が生じたことを示唆する。また、X1 の冒頭に生じるピッチ・リセットと速度の変化は、副次的活動が開始されたことを合図する。カテゴリー・ターム (C) は、一語名詞の形式をとる。その後引用標識「て」を伴う。「て」は、その直前の要素を問題視していることを合図する。「あるでしょう」は、カテゴリーに関する知識を聞き手が持っていること話し手が想定していることを示している。そして、聞き手にその知識を想起するように促すとともに、話し手の想定が適切であるかどうか反応を引き出す役割を果たしている。

Y1 には、X1 で提示されたカテゴリー・タームを知っているということを主張する「あ:」「うん」などの反応が起こる。これにより、話し手は聞き手がこのカテゴリー・タームの意味を理解できるとみなして、XM の主活動を開始もしくは再開する。

続く XM の冒頭に生じる指示詞やカテゴリー・タームは、話し手が X1 で提示したカテゴリー・タームを使用することが聞き手にとって問題ないと判断したことを合図する。また、X1-Y1 という副次的活動のために中断された活動 XM を再開することを合図する役割も果たしている。指示詞の形式は、「ア」系だけでなく、「ソ」系の指示詞も用いられる。例えば、(6) では「音声のフリークエンシイ」という事象をあらわすタームを提示して、聞き手の知識を調べる活動が行われている。

(6) [CallHome JA 2204]

((A が B に、この会話の収録が研究のために行われると伝えたときに、B が

らどんな研究なのかと質問された後))

- 01 XM⇒ A : だから>これ なんか< 言語のやつの研究とか言って  
 02 俺聞いてんには  
 03 X1→ なんかこの:(.) 音声のフリークエンシイって  
 04 あんじゃん?=  
 05 Y1→ B : =う:ん  
 06 XM⇒ A : それを::なんちゅうの? 研究してるちゅうの?  
 07 B : ほ:::う

3行目でAは、「音声のフリークエンシイ」というタームを提示して、聞き手が理解可能かどうか確認を求めたところ、5行目でBからこのタームの意味が理解可能であることを主張する反応が起こっている。そこで、Aは6行目で指示詞「それ」を用いて、「音声のフリークエンシイ」というタームを聞き手が知っているとみなしたことを示すとともに、2行目の終わりで中断した主活動を再開している。

### 3.2. 描写を用いてカテゴリーの理解を確認する

話し手が念頭においている指示対象を表すカテゴリー・タームを聞き手が知っているかどうか調べるプラクティスがある一方で、カテゴリーを描写して聞き手に指示対象の理解を促すプラクティスがある。(7)のような活動が生じ、それは(8)のような要素を資源として行われている。

(7) [XM⇒ 話し手: 会話の主活動]

- X1→ 話し手: **描写 (D)** が表すカテゴリーが理解可能か確認を求める  
 Y1→ 聞き手: カテゴリーが理解可能であることを主張する  
 XM⇒ 話し手: 会話の主活動の開始 [再開]

(8) [XM⇒ 話し手: 主活動]

- X1→ 話し手: フィラー **描写 (D)** があるでしょう  
 Y1→ 聞き手: 応答表現

XM⇒ 話し手: 指示詞 (ソ・ア系) …

具体的事例を (9) に示す。ここで話し手 A は、「ラミータさん」が手術をして「大変」だというニュースを B に伝えようとしている (3-7 行目)。その活動の中で、9 行目から、ラミータさんが手術をした身体部位の描写を開始している。

(9) [CallHome JA 2085]

- 01 A: あの:おばさんが:,  
02 B: う[ん].  
03 A: [あ]の:ラミータさんが:,  
04 B: うん.  
05 A: あの大変なのよね, 今.  
06 B: え?  
07 XM⇒ A: 大変. あの:手術して:腰のね,  
08 B: うん.  
09 X1→ A: あのほら, 大腿骨と腰んところをつなげてる  
10 X1→ [この丸い],  
11 B: [うんうん].  
12 X1→ A: ほら[腿]が動くようになっ[てる],  
13 B: [うん].  
14 [うん]  
15 [うん].  
16 X1→ A: [骨]があるでしょ?  
17 Y1→ B: うん.  
18 XM⇒ A: それが壊れちゃって:,  
19 B: う[ん].  
20 A: [あ]の手術してそれを, もう骨が普通だったら,  
21 あの:(.) ほら (.) 治-治るんだけどまた[骨]が,  
22 B: [うん].

- 23 う[ん].
- 24 A: [折]れたみたく[さ:],
- 25 B: [うん].
- 26 A: 折れれば折れ-後でくつつくで[しょう]?
- 27 B: [うん ].
- 28 A: それがもうくつつかないんだって.
- 29 歳取っているから.
- 30 B: あ:.

話し手 A は、9・12 行目で、ラミータさんが手術した身体の部位を指示するために、「大腿骨と腰んとこをつなげてる」「丸い」「腿が動くようになってる」と、骨格の部位、形状、機能の面から描写した後、B の理解を確認しようとしている。そして、そのそれぞれに対して、聞き手 B が反応を示している(11・13・14・15 行目)。ここで聞き手に求められているのは、人間の骨格のつくりに関する知識を参照して、どの骨のことを指すのか理解することである。話し手は聞き手の反応によって、念頭においている指示対象の理解が得られたと判断し、18 行目で、指示詞「それ」を用いて、ラミータさんの手術について語るといふ主活動を再開している。

#### 4. タームの選好

第3節では、話し手が念頭においている対象を指示するとき、カテゴリー・タームを選択するプラクティスと、描写を用いるプラクティスがあることを記述した。(9) の話し手は、身体部位を描写することによって、聞き手に指示対象の理解を促している。それは、この話し手が、この聞き手との間で、指示対象の共通理解を確立するために、描写を用いることが適切であると想定しているからである。これは、話し手が聞き手の知識に合わせて指示表現を選択しようとする側面を示している。一方、例えば医師同士の会話など、同じ身体部位を表すことのできる医学用語を話し手が知っていて、聞き手もその意味を理解できると想定される状況では、描写ではなく、カテゴリー・タームが用いられることが予測される。話し手は(10)に記述する「タームの選好」に従って、

ものを指示する表現を選択していると考えられる。

- (10) タームの選好: もし話し手が指示対象を表すタームを知っていて、その意味を聞き手が理解できると想定しているなら、そのタームを使用するのがよい。

4.1 節と 4.2 節では、「タームの選好」が成り立つことを、カテゴリー・タームの修復 (repair) と理解の証拠提示 (demonstration) の事例を用いて検証する。

#### 4.1.1. カテゴリー・タームの修復

話し手が「タームの選好」という指針に従って指示表現を選択しているということを、実際の会話の中に見て取ることができる。話し手は自分が知らないタームを、聞き手が知っていると想定しているとき、自身の知識の欠如を問題視する行動が見られる。例えば (11) で、アメリカに出張中の A が、子供へのお土産に購入しようとしているものを妻 B に伝えるときの行動を見てみよう。

#### (11) [CallHome JA 1032]

- 01 A: 一応ね:,  
02 B: [うん]  
03 XM⇒ A: [あの]あやね::にね:,  
04 B: うん  
05 X1→ A: あの:トレーナー n::>なんつうの<  
06 X1'→ 後ろにこう (0.3) >帽子の付いた<トレーナーとき,  
07 B: う:ん  
08 XM⇒ A: ↑ひろになんか買うかなと>思っているだけ<どき,  
09 B: あ本当?  
10 A: うん. 大学に:あるんだよ.

5 行目で A は、「あの:」とフィラーを発した後、「トレーナー」というカテゴ

リー・タームを用いたものの、「n:」と言い淀み「>なんつうの<」と発話している。ここで、話し手は「トレーナー」というカテゴリー・タームより、もっと適切な別のタームが存在し、そのタームを聞き手が知っている可能性があるにもかかわらず、その知識の欠如のために適切なタームを使用できないことを問題視していることが伺える。そして、6行目で「後ろにこう (0.3) >帽子の付いた<トレーナー」と描写していることから、Aが念頭においている指示対象がどのようなものかを伝えるためには、「トレーナー」というカテゴリー・タームでは不十分であり、より詳細にカテゴリーを表す必要があると考えていることが分かる。このAの行動は、タームの選好に志向したものとみなすことができる。一方、(9)でラミータさんが手術した身体部位を指示する際に、カテゴリー・タームを使用しないことを問題視する行動が観察されないのは、聞き手がタームを知らないと想定しているためであると考えられる。<sup>3</sup>

#### 4.2. 聞き手によるカテゴリー理解の証拠提示

「名前の選好」という指針は、聞き手がある対象を「名前」を用いて認識できると想定できるならば、指示対象がどのようなものか描写しなくても、聞き手は、話し手が意図する指示対象を認識できるとみなして会話を進めることができるということを意味する。これと平行して、「タームの選好」という指針は、ある対象を指示するとき使用する「ターム」を聞き手が知っている想定するならば、指示対象がどのようなものなのかも知っているとみなして会話

3 カテゴリー・タームの使用は、相手の知識を想定した交渉の上に成り立っているということとを、以下の事例にも見て取ることができる。

[CallHome JA 2157]

((生まれてくる赤ちゃんが使うベッドがまだ用意できていないということが話題になっている))

01 → A: だから最悪の場合はこうき:がつこうでたなんて言うの? ああ四角いやつ?

02 [あれ] 漬-

03 B: [あ! こう]きのベットあんのんちゃう?

1行目でAは「なんていうの?」と言った後に「あ四角いやつ?」と描写している。これは、Aは指示対象を「ベッド」というカテゴリー・タームで表現することが適切ではないかもしれないと考えていることの表れであり、もっと適切なタームを知っていれば、それを使った方がよいということに志向した行動である。3行目でBは「ベット」というカテゴリー・タームを「こうきのベットあんのんちゃう?」という「質問」に埋め込み(Jefferson (1987))、この「ベッド」というタームの使用を推奨している。

を進めることができるということの意味する。このことは、聞き手によるカテゴリーの理解を証拠提示する事例に見て取ることができる。

例えば、(12) では、話し手 A は 6 行目で「袋」というカテゴリー・タームを発話した後、7-17 行目で、この「袋」がどのようなものなのか聞き手の理解を追求する。そして、聞き手から「ナイロンの」というタームが提示されると、共通理解が成立したもとして、会話を進行させている。

(12) [CallHome JA 2085]

((A は B に送ろうと思って買っておいたプレゼントを失くしたことを告げた後))

- 01 B: 捨てちゃった訳じゃないでしょ.  
 02 A: 掃除のおばさんが捨てちゃったかもね.  
 03 B: あ:[:  
 04 A: [分かる? 私ほっといたからずっと.  
 05 B: ふう:::ん  
 06 XM⇒ A: でほら袋に-  
 07 X1→ あの: ほら (0.3) ヒニールの:(1.2)  
 08 B: あ[あ:  
 09 X1→ A: [袋に- ほら: あの:: (0.2) 普通の袋あるでしょ.  
 10 Y1→ B: う:::ん  
 11 X2→ A: ぐちゃぐちゃとしたやつ あの::  
 12 B: う:::ん  
 13 X2→ A: あの::  
 14 B: う:::[ん  
 15 X3→ A: [何?=  
 16 Y3→ B: =ナイロン[のね.  
 17 X3→ A: [うん ナイロンのね.  
 18 XM⇒ あれ に入ってたから, もしかしたら  
 19 >それとも私<会社持ってたかな?  
 20 探しても探してもないんだよね.

Aは、6行目で「袋」というカテゴリー・タームを用いたが、7・9行目の「ビニールの袋」、9行目の「普通の袋」という描写を用いて、より詳細なカテゴリー化によって聞き手の理解を促そうとしている。これに対して、10行目で聞き手から理解の主張を示す反応が起こっている。それにもかかわらず、11行目では「ぐちゃぐちゃとしたやつ」と描写し、11・13行目でフィルター「あの::」を用いて、より適切な表現を探そうとしていることが見て取れる。しかし、適切な言葉が思い浮かばず、15行目で「何？」と聞き手Bに助けを求めると、これに応じて「ナイロン」というタームが提示されている(16行目)。このタームが発話されるやいなや、話し手は「うん ナイロンのね。」と、まさにそれが自分が探していたタームであるということを認めている。それまで話し手Aは様々な表現を発話しているが、聞き手Bからカテゴリーの理解の証拠提示がなされるまで、カテゴリーの共通理解がなされたとみなす行動をとっていない。

では、タームの追求が続行されたのはなぜだろうか。それは、プレゼントが捨てられてしまったと考える理由を説明しなければならない話し手にとって、プレゼントを入れていた袋が、捨てられても不思議ではない類のものであったことを聞き手に理解させる必要があるからである。そのために選択された「ナイロン」というタームは、どのような「袋」であるのかを聞き手が理解できるとみなせる最も適した表現であったと言える。このように、聞き手による理解の証拠提示の追求が行われることは、話し手が「タームの選好」という指針に志向して、対象を指示する表現を選択しているということを示している。

## 5. カテゴリーの理解と主活動の達成

第4節で取り上げた事例にも見られるように、話し手がある対象を表す適切なタームの産出が困難であるという問題に対処するために、描写によって、聞き手により適切なカテゴリーの理解を促す活動が行われる。とりわけ、質問や要請のように、指示対象が何なのか聞き手が理解できないと主活動を成し遂げることが困難な場合は、聞き手の理解の追求が行われる。

(13)は、アメリカに住むAが、日本でしか手に入らない欲しいものの購入をBに依頼するために行われたものである。3行目から、買って欲しいもの

が何なのかを描写（3・4・6・7・8行目）とカテゴリー・タームを用いて、聞き手の知識を調べる活動を行っている。

(13) [CallHome JA 1263]

- 01 A: ↑>ところで< 変な事聞いていい?
- 02 B: うん
- 03 X1→ A: あのさ 日本にあるさ: ,
- 04 X1→ .hh [ええ]と::: ちっちゃい ほら 蛙があるじゃない.
- 05 Y1→ B: [うん]
- 06 X2→ A: みどりの蛙. 一センチ四方の.
- 07 X2→ <一センチより小さいかもしれない.
- 08 X2→ お財布に入れるや[つ ].
- 09 B: [うん]
- 10 X2→ A: お金がかえるとかさ無事かえるとかさ.
- 11 Y2→ B: うん
- 12 XM⇒ A: あれ どこに売ってんだろう.
- 13 (0.3)
- 14 B: あれ って なんか: (0.3) なんか (.) お寺とか神社とかの: ,
- 15 A: >お土産屋<さん:だよね:
- ((この後、Bの問いかけにより、Aが「蛙」を欲しいと言い、Bに購入を依頼する。))

3-4行目でAは、念頭に置いている対象の属性を「日本にある」「ちっちゃい」と描写し、その対象が「蛙」としてカテゴリー化されるものであることを示す。しかし、さらに描写を追加する。「みどりの蛙」「一センチ四方の」と色と大きさを描写し（6行目）、大きさに関しては「一センチより小さいかもしれない」と正確な情報に修復（7行目）した後、「お財布に入れるやつ」と使い方を描写し（8行目）、これら複数の描写を音的に途切れることなく追加している。これに対して、9行目でBから「うん」という理解の主張が起こっている。その後も、Aはなお「お金がかえるとかさ無事かえるとかさ」と描写を続けるが、

11 行目で B から再び「うん」という反応が起こると、この反応を受けて、12 行目で A は「あれ」という指示詞を用いて、指示対象に関する質問を行っている。ここで話し手は、指示対象がどのようなものなのか聞き手に理解させることができなければ適切な回答を得難い「質問」という主活動を実現するため、カテゴリーに関する聞き手の理解が追求されている。<sup>4</sup>そして、「ターム」を用いることが困難な場合には、話し手の意図するカテゴリーについて聞き手の理解が得られたと判断できるまで、描写による追求が行われる。このようなカテゴリーの理解の追求がなされる事例は、「聞き手に合わせたデザインの選好」に志向して指示が行われることを証拠づけるものである。

## 6. タームの使用に伴う問題に対処するプラクティス

話し手が念頭においている対象を指示するために用いようとするタームを聞き手が知らない可能性を想定し、タームの使用を問題視していることを示すプラクティスがある。

- 4 聞き手が過去の経験から認識可能であると想定される個体をサンプルとして提示することによって、カテゴリーの理解を得ようとすることもある。

[CallHome JA 1541]

((アメリカにいる母 A が長野にいる娘 B (えみ) に))

01 A: [えみちゃん今度]それでね；

02 あのこと::::: n:n:<松本>城でもなんでもいいんだけど:[:;

03 B: [うん]

04 → A: おまもりで↑ママがほら.h<きれ:いな>あの(.)あのじゅー あほら(.)

05 → え:おまもりの:まるいやつけてるでしょう.

06 B: う:ん

07 A: あ[れ]↑なんか二三-

08 B: [何] すず?

09 A: すず

10 B: . hh うんうん

11 A: <買って>おいて.=あれ非常に評判がよくて↑どこで手に入れたとかって>

12 みんなきれいなよね:あれね:. それでみんなに [言われるの.]

13 B: [ふ:::::ん]

この例は、6 行目の認識主張を得て、話し手は聞き手が指示対象を認識できているというを確認後、同じようなものを買って欲しいという依頼をしている。「買っておいて」という叙述内容から、「あれ」は母が持っている特定のおまもりではなく、それと同類のものというカテゴリーを指示しているということが理解できる。8 行目では、聞き手から、タームの候補「すず」が提示され、理解の証拠提示が起こっている。この事例も、「タームの選好」を証拠づけるものである。

(14) X1→ 話し手：フィラー ターム (C) ていうの？

X2→ 話し手：描写

(14) の X1 のフォーマットを上昇調のイントネーションで発話することによって、ターム (C) を使用すると、聞き手がその意味 (指示対象) を理解できないという問題が生じる可能性を想定していることを合図している。<sup>5</sup> そして、その問題に配慮して、X2 で描写を行っている。

(15) は、アメリカで家族とともに暮らしている A が、日本から送ってもらった畳の上敷き (A は「ゴザ」と言っている) を床に留めるためのピンに言及するとき、A は「プッシュピン」というタームを使用することを問題視している。

(15) [CallHome JA 1628]

((アメリカ在住の姉 A は、日本在住の妹 B に、日本から送ってもらった「ゴザ」について話している))

01 A: うん>ほいで< (.) それと昨日さ:, あのあれが着いたゴザ.

02 B: あ着いたけ.

03 A: うん

04 B: .hh

05 A: ほんでな,

06 B: う[ん

07 A: [あの::: そのゴザもその

08 .hh↓もうすぐひこうって言うとなやけどな,

09 B: うん

10 XM⇒ A: どうやって留めればいかなって<こっちに

11 そんななが:::い棒の

12 (0.6)

5 Kushida (2015) は、「Xていう人」という名前引用描写 (Name-quoting descriptor) が、指示対象が話し手と受け手との共有知識の領域内でないという認識上の距離 (epistemic distance) を主張 (claim) するという仕事を行っていると論じている。(14) では X1 の「C ていう」という形式によって、タームの語彙的知識が話し手と聞き手との間で共有されていないと想定していることが示唆される。

- 13 X1→ A: プッシュピンというんかいね?  
 14 YM⇒ B: [無い]か.  
 15 X2→ A: [あの]画鋸みたいなのがな?  
 16 B: [うん-]  
 17 XM⇒ A: [無い] かもしれん↓てテッドが言うとなや?  
 18 B: ふ:::ん  
 19 A: ほんでな, あの::: (. ) 分からんけど:::u- 今度 (. )  
 20 ゆ-時間のある時に探しに行ってみるってゆって.  
 21 B: そっか:::.  
 22 A: [うん]

11 行目で A は「なが:::い棒の」と描写をし始め、0.6 秒の沈黙の後、「プッシュピン」というタームを発話している。(17 行目で、「プッシュピン」というタームが、英語話者である A の夫が使った言葉を引用したタームであるということがわかる。後続の会話では、A は「ピン」というタームを使っている)。「プッシュピン」という音の高さは、沈黙を挟んではいるが、「なが:::い棒の」とつながり得るように発話されている。A は「プッシュピン」と発話した後に「というんかいね」というフレーズを付加して、この英語のタームを用いることが、聞き手にとって必ずしも最適ではないと想定していることを示し、理解を促すために「画鋸みたいなの」という描写を続けて行っている。一方、A の家族が「ゴザ」をどうやってとめればよいか思案していた (7-8・10 行目) という先行文脈から、聞き手 B には「なが:::い棒の」はゴザを留める道具の属性を描写したものであると推論することができる。それゆえ A が「プッシュピンっていうんかいね?」(13 行目) と言い終わると同時に、B は「無いか。」(14 行目) と、A が言わんとしていたことを先取りして述べている。

次の事例では、話し手 A は「キモセラピー」というタームが日本語では何という言葉に相当するのか知らないために、聞き手が知らない想定するタームを使用している。

(16) [CallHome 2157]

((A は義父「パパさん」(1 行目) が病気なので、出産のときに義母に手伝いに来てもらうことができないと日本の母 B に話す。))

- 01 A: もうパパさん:すごいしんどいみたい。  
 02 B: あ:そう:::  
 03 A: う:ん>だから<クリスマスにももうほとんど何も  
 04 しはらへんみたい°むこうも°  
 05 B: ふ::ん あ::ほんとう:  
 06 A: .hh う:んも:::すごい(.) 強い薬のんではるし:,  
 07 B: あ:::  
 08 X1→ A: キモセラピー:::っていうの?  
 09 B: [うん]  
 10 X2→ A: [なん] ていうの? あれ. 放射能あてるやつ?:  
 11 B: あ:=  
 12 A: =あたしよう知らんねんけど?:  
 13 Y2→ B: あ放射能な:  
 14 A: うんキモセラピーっていうねんけど:  
 15 XM⇒ それ:: も:(.) やってはるし:,  
 16 B: は::  
 17 A: だからすごいなんか(.) 副作用で:なんかあんまり  
 18 気分がよくないねんて.  
 19 B: あそう.  
 20 A: う:ん

8 行目で A は、「キモセラピー」というタームの末尾の音節を伸ばし、「ていうの?」というフレーズを付加することで、このタームは聞き手にとって馴染みがないと想定していることを示している。10 行目では、このタームに相当する日本語を知らないことを示し、描写によって放射能をあてる治療を意味することを伝えている。すると、11 行目で B は「あ:」と理解を示す反応を返している。

12行目の「あたしよう知らんねんけど:~?」という発話は、音声的特徴から、Aは治療法については、放射能をあてる治療だということぐらいしかよく知らないということを意味しているように聞くことができる。13行目でBは「あ放射能な:」と、10行目でAが用いたのと同じ言葉を用いて、タームの意味を理解できることを主張している。ここで、例えば「あ:抗がん治療ね」のような別の言葉を用いて、タームの意味を理解できることの証拠提示が行われたわけではないが、Aは、Bは自分と同等の知識はあり、「キモセラピー」というタームが何を意味するのかは伝わったと判断することはできる。そこで、Aは「キモセラピーっていうねんけど:」と、もとのタームを用いて説明することで、それ以上聞き手がタームを理解できるかどうか追求する必要がないと判断したことを示し、15行目で「それ」という指示詞を用いて主活動を進行させている。

専門用語の選択が、話し手の社会的アイデンティティを指標・喚起すると主張する Kitzienger & Mandelbaum (2013) は、産婦人科カウンセラーと相談者との会話において、相談者がタームを理解できると想定しているならば、そのタームを使わなければならない、という「タームの選好」という指針に従って語彙の選択が行われると主張している。その証拠として、相談者が専門用語を知らない想定したカウンセラーが、*waters from above the baby's bottom* という描写を用いた後、相談者が自ら *hind waters* という専門用語を用いて再指示を行う事例を挙げている。この相談者の行為は、カウンセラーが相談者の知識に関して誤った想定をしたこと（実際より知識がないとみなしたこと）に対して、抗議の念を示したものと分析している（Kitzienger & Mandelbaum 2013:184）。このような現象は、ある対象を指示する際に、タームを聞き手が理解できると想定しているならば、タームを用いなければならない、という「タームの選好」という指針の存在を支持するものとなり、このタームの選好という指針は、話し手は指示する人物を受け手が名前で認識できると想定しているならば、その名前を使わなければならないという「名前の選好」に平行していると述べている。Kitzienger & Mandelbaum が述べるように、聞き手が持っている知識を過小に見積もってタームを使用しないことは、聞き手が認識可能な人物の名前を知らない想定することよりも、問題が大きい。そのため、話し手は聞き手の知

識に配慮して、慎重にタームの選択を見極めなければならない。本稿で取り上げた事例は、「タームの選好」という指針が、専門用語の選択だけではなく、日常会話で指示対象のカテゴリに言及する際に用いられるカテゴリ・タームに関しても成り立つということを示している。

## 7. まとめ

本稿では、話し手が念頭においているものを指示する際に、指示対象のカテゴリに関する知識を聞き手がもっているかどうか事前に調べるプラクティスについて記述した。そして、カテゴリ・タームを用いるか描写を用いるかという選択に関して、聞き手がタームを理解することが可能だと想定するならばタームを用いよ、という「タームの選好」という指針にそって指示が行われることを検証した。さらに、タームの使用の有無によって、話し手が聞き手の知識をどのように見積もっているかが分かるため、聞き手の知識を過少に見積もることによって生じうる問題を予測し、その問題を回避しつつ、会話の主活動を円滑に行うプラクティスが用いられることを指摘した。したがって、話し手は、自分が念頭においている指示対象を聞き手に適切に理解させるために、カテゴリに関する知識を聞き手と共有できるかどうかという側面を考慮して、対象を指示する表現を選択している。すなわち、指示表現の選択（デザイン）は、単に聞き手に指示対象の理解を促すということだけでなく、会話の主活動を成し遂げるために行われているということができる。

これまで、会話分析の手法を用いた指示研究では、主に人物や場所など個別識別可能な対象を指示するプラクティスについて検討されてきたが、本稿では人物を指示する「名前の選択」と平行して、ものを指示する「タームの選好」が成り立つことを例証することによって、より広範囲の指示現象を記述できる可能性を示した。

\* 本稿の構想過程で串田秀也先生より有益な示唆をいただいた。記して感謝の意を表したい。

## 参考文献

- Jefferson, Gail 1987. "On Exposed and Embedded Correction in Conversation," in G. Button and J.R.E. Lee (Eds.) *Talk and Social Organization*, pp. 86-100, Clevedon, UK: Multilingual Matters. [Originally in *Studium Linqvistik*, (1983) vol. 14, 58-68.]
- Kitzinger, Celia & Jenny Mandelbaum. 2013. "Word Selection and Social Identities in Talk-in-Interaction," *Communication Monographs* 80 (2): 176-198.
- Kushida, Shuya. 2015. "Using Names for Referring without Claiming Shared Knowledge: Name-Quoting Descriptors in Japanese," *Research on Language and Social Interaction*, 48 (2), 230-251.
- Sacks, Harvey, Emanuel A. Schegloff and Gail Jefferson. 1974. "A Simplest Systematics for the Organization of Turn-Taking for Conversation," *Language* 50: 696-735.
- Sacks, Harvey and Emanuel A. Schegloff. 1979. "Two Preferences in the Organization of References to Persons in Conversation and their Interaction," In G. Psathas, (ed.) *Everyday Language: Studies in Ethnomethodology*, 15-21, New York: Irvington Publishers.
- Schegloff, Emanuel. A. 1996. "Some Practices for Referring to Persons in Talk-in-Interaction: A Partial Sketch of a Systematics," In B.A. Fox (ed.) *Studies in Anaphora*, pp. 437-485, Amsterdam/ Philadelphia: John Benjamins.
- 須賀あゆみ. 2007. 「指示交渉と『あれ』の相互行為上の機能」溝越彰他(編)『英語と文法と—鈴木英一教授還暦記念論文集』157-169, 東京: 開拓社.
- 須賀あゆみ. 2014. 「受け手の知識に関する想定と二段構えの指示交渉—日常会話の分析から—」『英語学英米文学論集』40:1-23, 奈良女子大学英語英米文学会.
- Wheatley, Barbara, Masayo Kaneko, and Megumi Kobayashi. 1996. *CALLHOME Japanese Transcripts*, LDC96T18. Philadelphia: Linguistic Data Consortium.

## トランスクリプト記号一覧

[	重複の始まり
]	重複の終わり
(0.7)	間隙(秒)
(.)	0.1秒前後の間隙
:	音声の引き延ばし
-	音声の中断
=	2つの発話が途切れなく密着
<	急いで続けられた発話
. / ? / ,	下降調・上昇調・継続を示す抑揚
↑ / ↓	直後のピッチの上昇・下降
<u>文字</u>	周辺と比べて大きい音量, 高い音
°文字°	周辺と比べて小さい音量, 低い音
¥文字¥	ほほえみながら発話している音声
hh	呼気音
.hh	吸気音
<文字>	周辺と比べて速度が遅い
>文字<	周辺と比べて速度が速い
(( ))	転記者による注釈
( )	聞き取りが不可能
→ ⇒	分析において注目する行